Bulletin of Faculty of Education, Nagasaki University : Curriculum and Teaching №42 (2004) 59-64

親子間の価値意識と子育て支援

後藤　ヨシ子・濱田　梨華

（平成15年10月31日受理）

Value Consciousness between Parent-Child and Support For Child Care

Yoshiko GOTO, Rika HAMADA

(Received October 31, 2003)

はじめに

現在，子どもたちはあふれる情報の中に生きている。そして親たちが子どもに求める価値観や常識，要求をそのまま素直に疑うことなく受け入れる，というふうにはいかない環境にある。親たちは，今を耐えて勉強することが，将来の幸せ，豊かな生活につながると考える。しかしちまたにあふれるさまざまな出来事や情報は，それとは反対のメッセージを送り続けており，これまでの親の常識や基準が通用しなくなってきているともいえる。大人の側も同様である。今を耐えて豊かな生活という「物語」を信じることのできない先行き不透明感を抱きつつ，さりとて新たな見とおしや信ずべき価値観を見いだすことが出来ず不全感のなかで戸惑っている向きもある。実際子どもたちには「親の背中が見えない」，一方親たちは「子どもが見えなくなった」と「子どもの荒れやいらだち」に示される「変貌」ぶりに戸惑い子ども理解に悩むことも少なくない。そこで21世紀を生きる子どもたちに物の豊かさ以外にどんな願いを伝えようとしているのか。社会の諸構造の激しい変化のなか，何が社会の基本的な価値なのかを特定することは必ずしも容易なことではないが，しかし日々の育児行動において，親は子どもに大事な文化・価値観を意識すると否とにかかわらず伝達していると考える。

今回は今日の価値観の流動化・多様性がいわれるなか，不易と流行，殊に児童・生徒期の親子間の価値意識の「類似」と「ずれ」について，社会の変化に伴い登場してきたものや流行をとりあげ，親や子どもたちはどのように受けとめ対応しているか考察した。

研究方法

調査対象は，長崎市内の小学校５年生・６年生（190名）とその保護者，中学校１年生・２年生（221名）とその保護者，長崎県立高等学校（２校）の２年生（287名）とその保護者，合計児童・生徒698名，保護者587名である。保護者の年齢別構成は小学生では40歳代前半の保護者が半数をしめ，次いで30歳代が多く，中学生では40歳代の前半が半数をしめ，次いで

長崎大学教育学部　生活健康講座（家政教育）

40歳代後半が多い。高校生では40歳代後半，次いで40歳代前半の保護者が多くしめていた（表1，2）。

表1．児童・生徒の発達段階別構成

（%）

	小学校	中学校	高等学校	計
男　子	91(47.9)	98(44.3)	128(44.6)	317(45.4)
女　子	99(52.1)	123(55.7)	159(55.4)	381(54.6)
計	190(100.0)	221(100.0)	287(100.0)	698(100.0)

表2．保護者の年齢別構成

（%）

	小学校	中学校	高等学校	計
３０歳～	56(31.8)	20(10.4)	4(1.8)	80(13.6)
４０歳～４４歳	91(51.7)	103(53.7)	80(36.5)	274(46.7)
４５歳～４９歳	25(14.2)	52(27.1)	95(43.4)	172(29.3)
５０歳～	4(2.3)	17(8.8)	40(18.3)	61(10.4)
	176(100.0)	192(100.0)	219(100.0)	587(100.0)

調査内容は，社会の変化にともない登場してきたものや流行に関する質問10項目について，自分の考えに近いものに「そう思う」，「どちらともいえない」，「そう思わない」の選択肢を用意し，質問紙法により回答をえた（表3）。

表3．調査内容

以下の質問に対して，あなたの考えに最も近いものを□の中から選んで（　）に記号を記入して下さい。

1．外で遊ぶよりも家の中でテレビゲーム・パソコンをする方がよい（　）
2．本を読むよりもマンガを読む方がよい（　）
3．一人で過ごすより友だちと過ごす方がよい（　）
4．家で手作りのご飯を食べるよりも外食の方がよい（　）
5．お惣菜やレトルト食品は大いに利用した方がよい（　）
6．お手伝いをするより勉強をする方がよい（　）
7．歩くと３０分かかる場所へは乗り物に乗るよりも，歩くほうがよい（　）
8．電卓より自分で計算するほうがよい（　）
9．黒い髪を染めて茶髪にするのもよい（　）
10．自分に似合った服装よりも流行の服を着る方がよい（　）

ア．そう思う　　イ．どちらともいえない　　ウ．そう思わない

結果

1．親子間の価値意識にみる「類似」

親や子どもは社会の変化に伴って新たに登場してきたものや流行についてどのように受けとめているか。必ずしも積極的には同意していない項目がみられた。中でも「家で手作りの食事をするよりも外食の方がよい」「そう思う」は小学生10.5%，中学生8.6%，高校生4.9%に対し，小学生の親2.8%，中学生の親5.7%，高校生の親2.3%，「お惣菜やレトルト食品は大いに使用した方がよい」「そう思う」は小学生6.8%，中学生5.9%，高校生9.8%に対し，小学生の親2.8%，中学生の親4.2%，高校生の親1.8%にみるように肯定的にとらえる割合は親子ともにとても少ない。また「お手伝いをするより勉強するほうがよい」「そう思う」は小学生11.1%，中学生16.3%，高校生15.3%に対し，小学生の親5.1%，中学生の親5.2%，高校生の親2.3%，「歩くと30分以上かかる場所へは乗り物に乗るよりも歩くほうがよい」「そう思わない」は小学生24.2%，中学生25.8%，高校生30.0%に対し，小学生の親10.2%，中学生の親20.8%，高校生の親11.4%にみるようにこれらは社会の変化に伴い新たに登場したものに，必ずしも積極的に同意していないことがわかる。そして「どちらともいえない」の回答の割合が高くみられていたことからも，かって重視していたものに対しては変わらず支持しており（不易），同時に新たなものへの対応には柔軟にうけとめている傾向がみられた。それは親子ともに考えや受けとめ方は類似していた。

2．親子間の価値意識にみる「ずれ」

親子間の価値意識に大きく「ずれ」が生じている項目がある。それは子どもたちの方が社会の変化に伴い登場してきたものや流行を敏感に受けとめ，積極的に取り入れているものであり統計的にも有意差がみられた。

中でも「外で遊ぶよりもテレビゲーム・パソコンのほうがよい」「そう思わない」は小学生55.3%，中学生47.5%，高校生41.8%に対し，小学生の親81.3%，中学生の親73.4%，高校生の親74.4%，「自分に似合う服装よりも流行の服の方がよい」「そう思わない」は小学生53.7%，中学生49.3%，高校生44.3%に対し，小学生の親61.4%，中学生の親71.9%，高校生の親78.1%にみるように子どもたちの割合よりも親の同意しない割合の高さがうかがえる。また「本を読むよりもマンガを読む方がよい」「そう思う」は小学生29.5%，中学生34.4%，高校生33.4%に対し，小学生の親1.7%，中学生の親1.6%，高校生の親1.4%にみるように，親の同意の少なさが目だっている。さらに「黒い髪を染めて茶髪にするのもよい」「そう思う」は小学生10.5%，中学生28.1%，高校生41.1%に対し，小学生の親7.4%，中学生の親16.1%，高校生の親7.8%にみるように肯定的にとらえる子どもたちに対し，それに同意する親の割合は少なく，親子間のずれは大きい。殊に「茶髪にするのもよい」と同意している高校生は41.1%をしめているが，親は7.8%にすぎないことがわかる（表4，5，6，図1－1，1－2，2－1，2－2）。

表４．外で遊ぶよりも家の中でテレビゲーム・パソコンをする方がよい

（%）

		小学生	中学生	高校生
子	ア．そう思う	16(8.4)	29(13.1)	41(14.3)
	イ．どちらともいえない	69(36.3)	87(39.4)	126(43.9)
	ウ．そう思わない	105(55.3)	105(47.5)	120(41.8)
親	ア．そう思う	4(2.3)	5(2.6)	1(0.5)
	イ．どちらともいえない	29(16.5)	46(24.0)	55(25.1)
	ウ．そう思わない	143(81.3)	141(73.4)	163(74.4)

表５．本を読むよりもマンガを読む方がよい

（%）

		小学生	中学生	高校生
子	ア．そう思う	56(29.5)	76(34.4)	96(33.4)
	イ．どちらともいえない	70(36.8)	88(39.8)	153(53.3)
	ウ．そう思わない	64(33.7)	57(25.8)	38(13.2)
親	ア．そう思う	3(1.7)	3(1.6)	3(1.4)
	イ．どちらともいえない	53(30.1)	54(28.1)	66(30.1)
	ウ．そう思わない	120(68.2)	135(70.3)	150(68.5)

表６．黒い髪を染めて茶髪にしてもよい

（%）

		小学生	中学生	高校生
子	ア．そう思う	20(10.5)	62(28.1)	118(41.1)
	イ．どちらともいえない	72(37.9)	84(38.0)	126(43.9)
	ウ．そう思わない	98(51.6)	75(33.9)	43(15.0)
親	ア．そう思う	13(7.4)	31(16.1)	17(7.8)
	イ．どちらともいえない	70(39.8)	98(51.0)	65(29.7)
	ウ．そう思わない	93(52.8)	63(32.8)	137(62.6)

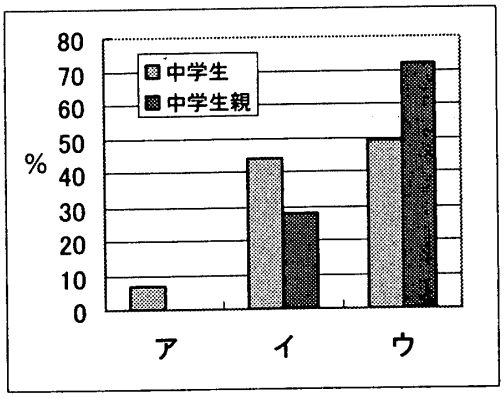

図１－１．中学生と親

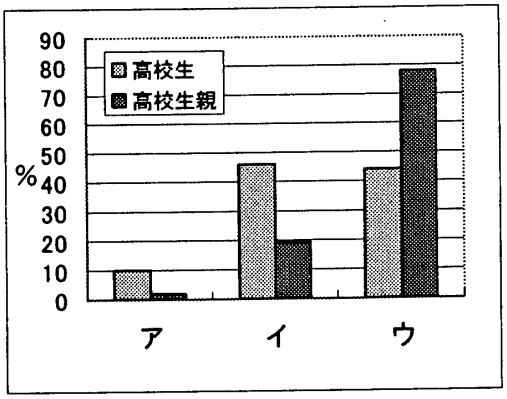

図１－２．高校生と親

「自分に似合った服装よりも流行の服を着る方がよい」

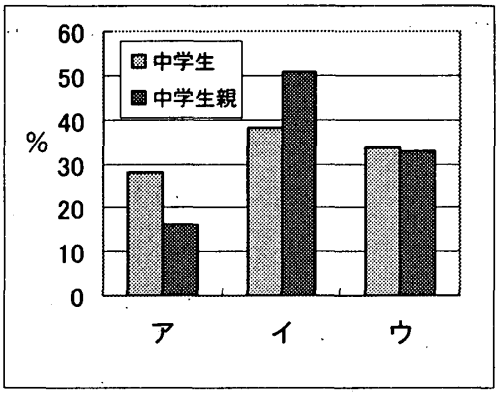

図２－１．中学生と親

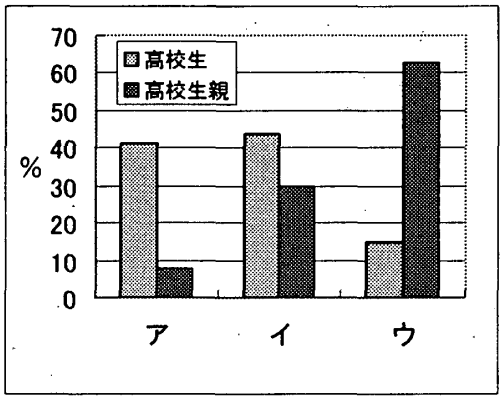

図２－２．高校生と親

「黒い髪を染めて茶髪にするのもよい」

３．子どもの発達段階別にみる「類似」と「ずれ」

子どもの発達段階別では，統計的に有意差のない項目は，「外で遊ぶより家の中でテレビゲーム・パソコンをする方がよい」，「家で手づくりのご飯を食べるよりも外食をした方がよい」，「お手伝いをするより勉強をする方がよい」，「自分に似合った服装よりも流行の服を着る方がよい」にみられていた。

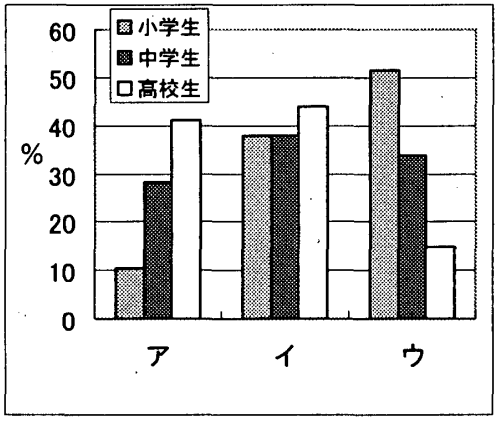

図２－３．子どもの発達段階別
「黒い髪を染めて茶髪にするのもよい」

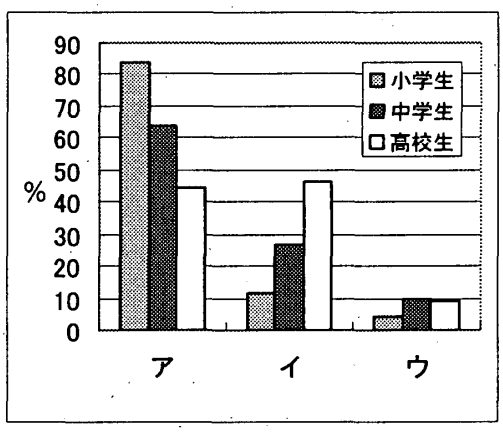

図３．子どもの発達段階別
「一人で過ごすより友達と過ごす方がよい」

一方，小・中・高校生と発達段階にともない，新に登場してきたものや流行の方に同意しており統計的に有意差のみられる項目は，「電卓よりも自分で計算をするほうがよい」「そう思う」は小学生45.8%，中学生33.5%，高校生22.3%にみられるように小学生は「自分で計算する」という考えが高い割合を示していた。一方「黒い髪を染めて茶髪にするのもよい」「そう思う」は小学生10.5%，中学生28.1%，高校生41.1%であり小学生でも１割は同意を示しているが，中学・高校生へと発達に伴い同意を示す割合は増加し，高校生では小学生のほぼ４倍みられる。他方，「一人で過ごすより友達と過ごすほうがよい」「そう思う」は小学生84.2%，中学生63.8%，高校生44.6%にみられるように人間関係に関する項目では，小学生は友達と過ごすが８割強を示しているが，高校生に至っては減少し半数

を割っている。受験の準備へ向けての時間の不足，また電子メデイアの普及により，いつでも一人遊びができる環境にもある。気がかりではあるが，やむなくなのか，より「個」を好む傾向がみられていた（図２－３，３）。

おわりに

今日の子どもたちは，大人の常識とはものごとに対するイメージやフイーリングが違ってきており，自分の思い通りにならないことが少しでもあると「むかつく」「きれる」などという言葉を発し大人を戸惑わせる。子どもたちから見れば，自分の常識内での行動なので大人の考えは理解できないということなのであろうか。また中学生や高校生にもなれば，「こんな自分になりたい」という理想へ近づくための努力，おしゃれもするし自分なりのこだわりももちはじめる。そのため子どもが青年期を迎えたとき，子どもと親がともに揺れ動きぶつかりあうことは少なくない。

今回は社会の変化に伴い登場してきたものや流行に対し，子どもたちはどのように受けとめ反応しているか，児童・生徒期の親子間の価値意識の「類似」と「ずれ」について考察した。親子間の価値意識において，もちろん類似している項目，いわば時代をこえて大事とする考え（不易）もみられたが，一方「ずれ」が大きく生じている項目がみられた。殊にテレビゲーム・パソコン，茶髪，流行服などにみられるように，新たなものや流行には子どもたちは積極的に同意し，親たちよりも敏感に反応していることが明らかであった。

これらの親子間の価値意識の「ずれ」は，親子間の「関係性」や日々の育児行動において重要な意味をもち，「ずれ」をどのように受けとめていくか，親のとまどいや悩みも深刻となる。事実子どもを理解することのむずかしさがあるが，価値意識の「ずれ」は，親世代の考えやものさしをそのまま押しつけても解決できるとは限らない。親の「思いこみ」や「決めつけ」をしても，素直に子どもは聞かないであろう。また氾濫する情報やマスメディアの影響，さらに受験への重圧など，子どもの生活や意識面での質的変化は，親世代との文化的すれちがいを生じている。「ずれ」は時代のなかで急速に変化している子どもの現実を親が見ようとしないところに要因があるのかもしれない。そこで親子間の価値意識の「ずれ」を埋めるには，子どもの言いなりに何でもやらせて，様子をみる方がよいのか。あるいは違いを詰めすぎることもなくうまく距離をとって親子相互に傷つかないようにするのがよいのか，新しい判断基準をどこにおいたらよいのかなど，価値意識の「ずれ」の解決は必ずしも容易ではない。日々の育児行動における悩み・不安や子育て観を率直に話し合える親（保育者）同志の交流・地域ネットワークの存在は，今日の子ども理解・親子間の「関係性」のあり方への支援にとって意義深く大事な役割になってきているといえる。

文献

１．山村賢明：多様化・流動化する価値観と子どもの教育　児童心理57(6), 32-43, 1982.
２．山極隆：不易と流行をどう考えるか　総合的な学習の実践№１, 28-29, 1997.
３．全生研常任委員会編：荒れる小学生をどうするか　大月書店　1998.
４．田中孝彦・高垣忠一郎編代表：中学生の世界１・２　大月書店　1999.
５．後藤ヨシ子：親の価値意識と子育て　長崎大学教育学部紀要教科教育学(37), 55-60, 2001.